

論文

近代日本と周縁

—浦河「天草」移民団の歴史と現在—

内 藤 辰 美
佐久間 美 穂

A Study on the Colonist-Group from AMAKUSA to URAKAWA in Hokkaido

Tatsumi Naito
Miho Sakuma

明治4（1871）年天草から「天草移民団」といわれる人々が北海道浦河に上陸した。天草を離れ浦河に着いた人々は昼なお暗い森林を開発し、苦難の歴史を重ねて、昭和37（1967）年には、村づくりの実践活動により北海道生活文化賞の栄に浴している。われわれは明治国家の北海道移住政策を検討するとともに、移住地をきた人びとの生活を観察し、そこから、近代日本を問おうとする。そして、小論におけるわれわれは、スタベンハーゲンが提示した「周縁性」、「周縁化」という概念に注目し活用を試みる。

キーワード：天草、天草移民団、浦河・杵臼、明治国家、開拓使、北海道移住政策、周縁性・周縁化

問題の所在

この小論を石牟さんの天草から始めよう。「私が生まれましたのは、熊本県の不知火海の中の小さな島である天草、天草の乱のありました天草です。両親とも天草です。天草というところは離島の典型の姿をしておりまして、近ごろ“辺境”という言葉が流行りますが、一種の辺境です。そこで生まれた人間たちは、人口が多くその島で自給自足できないものですから、長男というか家を継ぐ後とりを残して全部、島を出ていかなければならないという運命があるわけです。そこで、そういうところで生まれましたから、当然私の母も父も天草を出る運命を担っていて、私が生まれて三ヶ月ぐらい経ちましてから水俣に移ってまいりました」（石牟、1972、15）。

これまで天草の貧しさは多くの人によって記述

されてきた。「天草は本県南西部に位置し、四方を海に囲まれ、大矢野・上・下の三主島をはじめ、大小120余の島々からなる。海を挟んで、北に島原半島、北西に長崎がある。近世には肥後国天草郡であった。全島海岸線まで丘陵が迫り、平地に乏しい。したがって、耕地が少なく、また大河川がないため灌漑の便が悪く、天水に頼る所が多かったので干害に遭いやすかった。気候は温暖だが、地味は悪くて二毛作を行える田畑は少なく、また台風の被害を受けやすかった」（渡辺、1999、38）。多くの地域と同じように、天草にはいろいろな表情があるけれども、共通して語られるのは、その貧しさである。

近代日本とそれをリードした明治国家。その国家と人々がその国家を具体的に生きた地域。これは無数に語られたテーマである。そしていま、わ

れわれもこのテーマについて語ろうと試みる。地域を語ることは、そこに生きた人びとの生き方を語ることである。顧みれば、人は生きるために地域に執着し、生きるために地域を捨ててきた。残った人間と捨てた人間は、同じ人間だが、それまでの生き方と全くちがった生き方をするようになるという点では別の人間になるのである。

小論においてわれわれは「天草」を、そして「天草を捨てた人びと」を取り上げる。天草を捨てた人びとの行き先は九州であり、北海道であり、南方であり、シベリア、満州であった。移住地がどこであれ移住はそこに留まるよりはましな生活への期待を含んでいた。北海道浦河に移住した天草の人びと（天草移民団）もそうであった。しかし周縁である天草からの移住先はやはり周縁である北海道、浦河の地であった。温暖の地から北国への移住は勇気が必要としたにちがいない。今日のように情報がある時代ではなく、容易に行き来のできない未知の土地への移住である。重大な決心が必要であったことは容易に想像されるところである。

われわれのねらいを示そう。天草と浦河という二つの周縁をとりあげ、近代日本と明治国家の移住政策を検討し、そこから、新しい国家＝明治国家の目標とその国家の下で周縁を生きた人びとの生き方を観察する。その際、われわれが意識したのは、スタベンハーゲンの周縁性ないし周縁化に対する指摘、すなわち、「周縁性ないし周縁化という概念を<システムの外>に置かれている人々のことというように考えてはならない。逆に、彼らは特定の経済システムと特定の権力構造に統合された人々、但しその最下層に統合され最も過酷な支配と搾取に苦しむ人々である」(Stavenhagen, 1981, 49) という、彼の、周縁性、周縁化に関する理解である。かつて天草という周縁を生きた人びとは、特定の経済システムと特定の権力構造に

統合され、過酷な支配と搾取に苦しんだ人々であった。もちろん、いま、天草を周縁ととらえる人はいない。北海道の浦河を周縁ととらえる人もいない。現代日本は天草をそして北海道を周縁から解放した。しかし、かつての周縁で育まれてきた風土はいまなお残存する。現代が、前近代や近代が持つ要素を全て消滅させたと考えるのは早計である。われわれの認識によれば、近代の探求は依然として課題である。

1. 天草の経済社会状況と天草移民団

明治4年(1871年)、官命を帯びて廻村中の若い武士朝山頼誉(禄十)による移住者募集が始まった。朝山頼誉(禄十)とは何者か。北野典夫は「北辺鎮護と蝦夷地開発の情熱を燃やした北海道開拓使庁の属領であったと思われる」と記述する(北野典夫、1985、245)。そして、『北海道史人名辞典』(北海道文化資料保存協会、昭和32年)から、朝山頼誉を次のように紹介する。「肥前大村藩士。天保14年(1843)12月生まれ。初名禄十。戊申の役奥羽征伐軍に従い、明治3年(1870)正月開拓少主典に任ぜられる。5月函館に出張し、7月権監事薄井龍之に随行して北海道各地を巡見し、開墾意見を上申し手開墾掛りとなり10月浦河詰を命ぜられる。閏10月開拓使は予算1万7千195両を以て明春浦河郡に農民50戸を募移するに決し、頼誉をして移民募集に出張せしめた。頼誉は平戸、大村、島原の3藩および長崎県(旧幕府直轄地・天草を含む)を巡回し、明治4(1871)年4月、肥前国彼杵郡(大村藩)の民24戸、肥後国天草郡の民21戸を募って、5月浦河郡に移し、彼杵(そのき)の民を西舎村に、天草の民を杵臼に土着せしめた」(北野、同上、245～246)。北野によれば、朝山の募集活動は、「国家的使命感に訴えた」ものであった(北野、同上、247)。江戸時代から長崎港外郭警備の任にあたってきた大村の

藩士であった朝山はロシアの動きに敏感であった。その思想は、「開拓使庁の官僚として、＜北海道を、一日も早く、皇国の図版として＜確立する＞ことを念願とした。したがって、彼は、杵臼、西舎の開拓村建設に全面的な援助を惜しかなかった。幸い彼は、明治3年10月以来、すなわち、天草農民が杵臼に入地する以前から北海道開拓使庁浦河詰め少典主だったわけであるが、入地の翌明治5年9月、日高、十勝両国を管轄する浦河支庁が設けられるや、大典主として庶務課長、民事課長兼務を拝命、主に開墾や漁業取締などを担当、開拓村の身近にいて彼らを支援できる地位にあった」(北野、同上、269～270)。

ところで、朝山＝開拓使の出した移住の条件はどのようなものであったか。

1. このたび、北海道に連れ越す者、7歳以上百歳を問わず、農具支度料として、1人宛15円を支給する。
2. 渡道にあたって、人はもちろん家具類何程でも、運賃その他の経費は一切政府が負担する。
3. 航海中は、毎日3度の飯を与え、渡道後においては、老若男女を問わず、満3カ年、左(下)の通り御扶助米を補助支給する。15歳以上 1日玄米7合扶持、7歳以上 1日玄米5合扶持、7歳以下 1日玄米3合扶持。なお、薬代は無料とし、薬料として1人1日3錢ずつ、また酒も支給する。これも、3カ年間継続される。(北野、同上、244、浦河町史編纂委員会、1971、上巻、153、新浦河町史編纂委員会、2002、上巻、201)。

「朝山禄十が、立原の隣村子宮地(新和町)を訪れたのは、やはり明治4年2月中旬のことであった。募集に応じて、いちはやく、36歳の小泉和平が、父母妻子6人とともに移住を決意する。大宮地村(新和町)では、高見半五郎、立原村(河浦町)では平田政治、この3家族が、同月28

日、そろって出願した。(北野、同上、248～249)。小泉和平に続き渡道の決意をした人々が現れた。「続々として、天草百姓たちが、朝山禄十の後を追ひ、富岡の郡役所まで出向いて名乗りをあげ、ここに、北海道入地開墾天草団体が編成されたのであった。21世帯、93名の老若男女であった」(北野、同上、248、浦河町史編纂委員会、1971、上巻、155～156、新浦河町史編纂委員会、2002、206～207)。小泉和平(小宮地村・真宗・36歳、父伊左衛門、母ハツ、妻イシ、長男辰平、長女シモ、次女クノ、中村喜平(小宮地村・真宗、母カナ、妻タミ、義弟菊太郎、長男喜六)、高尾岩平(子宮地村・真宗、妻リヨ、四男佐之治)、荒木角平(子宮地村・禪宗、妻トク、次男伊三郎、長女ヨシ、嫁ハナ)、大道千代(子宮地村・真宗、妻イワ、長男弥十(8歳)、次男九十(4歳)、三男留次(1歳))、本巢甚三郎(立原村・浄土宗、妻イシ、養子初治、長男熊三郎、次男寛市、三男庄太郎、長女ロク、次女ユキ、三女ヤイ)、荒木清吉(子宮地村・禪宗、知間ノシ、養女シモ、長女サヤ)、高見半五郎(大宮地村・禪宗、妻ヨノ、長男安平、次男大平、長女キク、次女スガ、三女サン、四女シメ)、山下庄太郎(立原村・浄土宗、母イナ、妹ツイ、姪タツ)、荒川伊十(立原村・浄土宗、母ハツ、弟勘市)、吉田謙次郎(立原村・浄土宗、妻シマ、長男松市、次男夏五郎、次女キチ、三女ワイ、四女トノ)、平田政治(立原村・浄土宗)、妻フサ、長男八郎、次男七郎、三男六郎、長女トラ、次女ユキ)、田崎万蔵(中田村、妻ルイ)、本巢直五郎(立原村・浄土宗、妻キク、弟喜之吉、長男万太郎(21歳)、次男竹松、次女ハン)、本巢竜八(立原村・浄土宗、妻トノ)、上野伝次郎(立原村・浄土宗、妻トイ、長男弥三郎、次男栄太、長女タケ、次女シモ)、蓑田代四郎(中田村・浄土宗、妻ミハ、長男伝十、次男南兵衛(4歳)、長女モミ(17歳)、次女ミカ)、蓑田

重平（中田村・浄土宗、独身）、吉田菊太郎（立原村・浄土宗、独身）、荒木土太郎（志岐村、禪宗・独身）中島菊五郎（立原村・浄土宗、独身）。

さて、当時の浦河の様子である。「海岸には榎屋根の役所が2軒、漁場を経営するシャモ（和人）の民家が2軒。榎屋根の役所とは、旧松前藩の番屋跡で、朝山禄十ら開拓使庁の出先役人が執務するところだ。ほかにはアイヌ人の草屋根が点在しており、各種各様の磯舟、丸木舟が舳っている」（北野、同上、252）。「浦河の港で長い船旅の疲れを癒すこと2・3日、その間、入港の翌5月14日には先遣隊が入植現地の調査を行い、いよいよ15日、大村団体が西舎へ、16日、天草団体が目指す杵臼へ向かった・・・（北野、同上、257）。杵臼の様子は次節の課題として、ここでは、もう少し、浦河・杵臼に移民団を送った天草の事情を北野典夫ほかの研究から見ておくことにしよう。

本巢甚三郎が移住前に住んでいた「高天ヶ原は、天草下島中央部に位置する立原村（河浦町新合）、島の中にありながら海の見えぬ山村である。・・・田畑面積は、宝暦11（1761）年反別11町1反27步（水田10町5反8畝12步、畑5反8畝15步）。これに対する人高は、いくらかさかのぼった時代の資料であるが、享保13（1728）年・・・15軒、男女110人のささやかな村だった。・・・時代がすすんでも、耕地面積はそれほど増加していないようだ。しかし、人口は、享保以来100年間で4倍強になった。すなわち、天保4（1833）年には、家数67軒、人数489（男239、女250）を数えるようになっている。まさに、このころでは、数字が示すように、立原村は、人口過剰に悩む、＜南国の寒村＞だったのである」（北野、同上、254）。高天ヶ原に限らず、天草は貧しい土地であった。天草の貧しさを示す一端である。「佐渡、壱岐、対馬、淡路が島嶼であるのにそれぞれ一国として処遇されてきたのに、それらより大きい天草が一

国をなしていないといのは、ひどく片手落ちだった感じがする。が、右のように一島にして一国というくにぐには、対馬国をのぞくほかはみな米作地なのである。律令時代から江戸時代にかけて土地の価格はどれほど米がとれるかにかかっていたということは、この『街道をゆく』を通じて触れつづけてきたような気がする。（たとえば、旧藩以来島差別のはなはだしい薩摩においては種子島とその島人だけを本土なみにあつかった。種子島は豊かに米がとれるからである。また、一般に、江戸期の社会階層における差別も、米が基準だったようにおもわれる。たとえば畑百姓は水田百姓よりはるかに下におかれていた）。天草諸島は山ばかりでしかも水流がすくなく、水田面積というのがじつにすくない。農家といっても、古来、農業だけで成立していた家はまれで、零細な漁業を兼ねたり、他のしごとをしたりした。天草諸島は海流がめぐり、日ざしがつよく、いかにもめぐまれた土地のように思えるが、生産といえば水田農業という単純な条件下の社会では、まことにめぐまれなかった」（司馬、2006、163）。米が基準であった時代、米の生産に従事する農家と従事しない漁家の間に仕切りがあったとしてもおかしくない。なお、天草の貧しさについては、次のような指摘もある。「『高浜村明細帳』によると、当時の高浜村の状態は百姓160軒に対し名子、無高水呑百姓らの下層民が102軒であったものが、それから30年下った寛政三（1791）年には百姓122件にたいし、名子、無高水呑百姓が200軒となり、下層困窮者が全村の三分の二を占める累増ぶりをしめたことを記録しており、明和三（1766）年に江戸から長崎へ派遣された幕府の役人も、当時の天草の貧しさに驚きのあまり呆然としたことが『福連木村他国出稼人取調帳』にのこされている。海にかこまれている以上、生業を海にもとめればよさそうなものであるが、天草はむかしから牛深

をのぞいては良港にめぐまれず、漁業もはなはだふるわなかった」(下中、1959、343～344)。宝暦11年(1761)の幕藩時代、天草は決して豊かなところではなかった。端的に言って貧しい地域であった。そうした天草の実態を別の専門家は次のように捉えている。「天草では<島原の乱>後の処理が島原藩よりやや遅れて実施された。・・・天草の最初の公的検地は・・・『慶長肥後国絵図』で寺沢広高の提出によるものであり、その後二代堅高の内検による増石高を島原の乱後、天草は山崎家治の支配する処となるが、検地改訂は行われておらず、わずか三年で天草は幕府の天領となった時点で鈴木重成の支配下に入る。・・・鈴木重成、重辰親子二代にわたって、天草の石高改正を訴え、ようやく万治二(1659)年、島原の乱後二十一年目にして検地改正の許可を幕府から得られ、いわゆる天草の「石半減」が実現されることになったのである」(高木、2006、186)。島原大変(寛政4、1792年)は天草にも大きな被害をもたらしたうえで田畑の年貢率は高率であった。「土地等級の細分化により、また検地見取りにより、村公称石高に対し年貢率が高く、特に畑年貢は異常に高率であったこと、加えて・・・雑穀年貢も徴収されていた。・・・そうした中で、天候不順で不作・凶作となればすぐ飢餓の状態に陥るのである。・・・島原の子守唄にみられるように、年貢が納められないため地主の家へ幼い子が子守奉公に出されたのはまだよい方で、家の借金の肩代わりに娘を売らなければならない家庭もあった。行く先は国内にも国外にも特に東南アジア方面には多かった」(高木、同上、194)。天草の貧しさは天災・人災の帰結であった。天草の貧しさは戦後にまで続く。「大小百二十余の島嶼(とうしょ)からなる天草の生産構造は、半農半漁と出稼ぎである。しかし島嶼(とうしょ)の共通的条件として耕地面積はすこぶる少なく、田地は総面

積の十九パーセントにすぎない。畑地の二十四パーセントを加えてもわずかに四十三パーセントである。したがって約半数にちかい農家が三反未満の零細農家であり、五反未満層は全体の六十パーセントに達している。副業としての漁業は食うためのぎりぎりの手段であった。半農半漁の生産構造は生活の必然として生まれたが、この場合、漁業はあくまで補助的なものでしかない。漁獲方法も、無動力船による延縄、一本釣りなど、幼稚で小規模なものである。しかもかぎられた湾内外の漁業はたちまちゆきづまり、生活の困窮はつるばかりである。地曳網、八田網などが沿岸漁業として発達したが、人口の増加はますます生活の貧困に拍車をかけた。その当時のうたに、チーン(珍しく)米食わん チーン米食わん ジョウジョウ(常々)カライモ(甘藷)に鯛のシャー(お菜)米が食卓を飾ることはない。白い飯がぞんぶんに食える冠婚葬祭を、指折り数えて待ちわびたのは老人や子どもたちばかりではなかったのである。この貧窮の突破口を出稼ぎにもとめたのだ」(下中、1960、140)。

天草から浦河に移民団を出した背景には、島の貧しい経済があった。そのことは明らかである。しかし、それだけでははるか遠隔のしかも寒冷の土地に移住するという決断はなかったであろう。そこには移住を決断させたほかの要因が存在した。すでにみた朝山禄十という人物の存在である。朝山禄十という先導者が天草の人びとの北海道移住を促した。もちろん厳しい土地での生活は移住者たちを苦しめた。しかし、朝山禄十の助力を得て、その移住はある意味では恵まれたものであった。朝山は移住者に対し、「諸君らに割り付けられた三十余万坪(百町歩余)の土地は、各人開墾自由である。地代はもちろん無料。しかもこのたび、入地より明治7年までは開墾料として一反につき金二円の奨励金が公布されることに相成っ

た。開墾して自分の所有地とする野に、お上では、ご褒美まで下さろうというのじゃ」と語ったという（北野、前掲、271）。「天草から移住民に対してなされた政府の保護と奨励を金額に換算するといかほどになるか。小泉和平方が書き残した『杵臼村記録書』は次のように記している。<杵臼村記録書：一部>一、戸数二十一戸ニテ人数九十二人（原文ノママ）ナリ。先ス運賃一人ニツキ七円ト見テ六百四十四円。一、右九十二人ノ内、八十人ハ金十五円ノ農具仕度料ヲ与エラレ、此ノ金千二百円ナリ。一、草屋ノ代価一棟九円ト見テ、金百八十九円ナリ。一、薄縁、手桶、水桶、流シ、取合ワセ代価一戸分オオヨソ二円四十銭ト見テ、村中ニテ金五十円四十銭ナリ。一、井戸、風呂桶、代価オオヨソ金七円ナリ。一、薪十五敷、代価大ヨソ金三円ナリ。一、御扶助米、菜料共、一日一人ニ付キ六銭ト見テ、三ケ年ノ間ニ金五千九百六十一円六十銭ナリ。一、薬価、金五十円ト見ル。一、（明治六年改築ノ）榎屋代金一棟ニツキ金百二十六円六十二銭五厘ツツ、此ノ代価金二千六百五十九円十二銭ナリ。一、畳一枚五十銭ト見テ、代価金六十三円ナリ。一、開墾地、明治八年ニ至リ三十一町四反五畝歩、此ノ開墾料金六百二十九円ナリ。合金一万四千四百五十六円十二銭五厘ナリ」（北野、前掲、新浦河町史編纂委員会、1971、上巻、204～205、杵臼記念事業協賛会『拓魂』<史料>1992、51）。

2. 集落杵臼の形成と現在

天草移民団が移住した杵臼は「幌別川に沿った沖積地」であった。「<杵臼>とは、アイヌ語のキニウスからきていて、ハンの木繁る大地という意味である。あたり一面、うっそうたる昼なお暗き大原始林であった」（浦河町史、上巻、156、北野、前掲、257）。「この地一帯は見渡す限りの原生林、直径五六尺に及ぶ大樹の天空に聳える者数

多く、背丈をなす草敷は熊、鹿、狼、きつね、うさぎの棲む恰好の場所だった。昼夜を分かたず出没するだけに危険も少なくなかった。原野には野馬も多数いた」（浦河町史編纂委員会、1971、上巻、146）。北野の記述には、「目的地を前にして女たちが立ちすくみ、そして泣き叫んだ」（北野、前掲、258）とあるが、昼なお暗い原始林に在って落胆と不安にとらわれたのであろう。杵臼には、開拓使の手で、入植者のために<村>がつくられていた。「これは内海源太郎の指揮によるもので、屋敷は三十間割、一戸が二間半に四間の草葺長屋が二列に並んで建てられ、床板を張り、畳代わりに薄縁が八枚づつ敷かれ、流し場が付き、居間にはいろりがあり、自在かぎが取り付けられていた。更に、共同井戸も掘っており、小屋掛けの五右衛門風呂も据えられ、家々には手桶二つに水樽一つが備え付けられていた」（新浦河町史編纂委員会、2002、上巻、20、浦河町史編纂委員会、1971、上巻、206＝杵臼記念事業協賛会、53、北野、前掲、259）。故郷を離れたことを悔やんだ者もあったであろう。期待した土地とのちがいに戸惑った者もいたにちがいない。しかし、その<村>から新しい生活は始まったのである。「家中の者が原始林の中に入った。開拓当初の杵臼では、子供も開墾地で働いた。入植申し込みに際し、七歳以上の者には農具仕度料一人宛15円が支給された」（北野、前掲、268）。

海産物に恵まれ、早くから開かれた沿岸に対し、昼なお暗い密林のなかで、熊や狼の出没に怯えながら大木を倒し、鋤を振る。粗末な葦小屋で迎えた最初の冬は、南国育ちの彼らにとっていかばかりだったか。いかに開拓使募集の移民団とはいえ、その苦労は筆舌に尽くしがたいものがあつたろう。「日高開発功労者蹟録」の中で、岡本仁五郎は「われわれの唯一の楽しみは、酒を飲んでうたうことでありました」（グルッペ21うらかわ、

1991、37)と結んでいる。「入植一年、開墾は僅かに各戸一二反程度であったという。・・・栗、そば、馬鈴薯、野菜が植えつけられた」(浦河町史編纂委員会1971、上巻、157)。「当時開墾の土地は割付で、それを各自が開墾したもので、地代は勿論無料であり、入地より明治八年までは開墾料として一反に付金二円の補助金が交付され、開墾した土地は自己の所有地となったのである。渡道条件に、十年間所定の土地を開拓すればその後は帰郷もかなえられるという約束もあっただけに、開墾にあたっては狼の遠吠えをきき、熊の出没に身の縮む思いをした時は、郷愁の念しきりに生じたということである」(浦河町史編纂委員会1971、上巻、157)。「しかし辛苦十年、血と汗によって開墾した沃地を見てはこの地への愛着がしきりに湧いて来る。そして連年内地からの移住者達が自分たちに比べて非常な悪条件をも克服して開墾に血みどろの戦いをしているのを知っては、今更に帰郷も鈍り、遂に住み慣れたこの地永住の地と決意するに至った」(同上、157、「杵臼百年想」日記念事業協賛会、55)。なお忘れてならないのは、先住民との関係である。北の厳しい土地で生きていく知恵を彼らは先住民から学んでいる。「野菜の加工と、多少の耕地からの稗の収穫と、そして山野に棲息する熊、鹿、兎の捕獲と幌内川を遡る鮭鱒と、ここに住む川魚の漁撈は余りある天恵で、アイヌ達の食糧事情は極めて豊かなものであった。彼等の健康と骨格の逞しさは、こうして天恵にもたらされた栄養の賜物だった。やがて開拓者の人々が彼等と接触して、彼らの生活から学びえた多くの生活をもつようになるのである」(浦河町史編纂委員会、1971、上巻、156)。

杵臼は明治4年の入植以来、いくつもできごとを経験し、歴史を重ねて現在を迎えている。彼らを移住させた国家も日本の社会体制も、この間、大きく変容した。とくに、日清、日露、第二次世

界大戦という三つの戦争は日本の国家と社会を大きく変えてきた。天草移民団によって形成された杵臼もそうした動きの中で変化を遂げてきた。ここでは、杵臼の形成・発展を記す年表と、二つの回想、松田薫「杵臼百年想、畑中武夫「杵臼村の成立とその発展過程」(杵臼記念事業協賛会『拓魂』<資料>平成4年11月)を手引きとして、杵臼の形成・発展の過程をみておくことにしよう。

- | | |
|-------|---|
| 明治4年 | 天草移民団入植 |
| 明治6年 | 読み書きの上手な水田万蔵宅で寺子屋式教育始める |
| 明治7年 | 開拓使庁から各戸に農耕馬一棟貸与、米を試作するが失敗、政府ナシ・リング栽培させる。 |
| 明治10年 | 野菜栽培盛ん、市街地に売り出す |
| 明治14年 | バツタの来襲被害大 |
| 明治15年 | 吉田松市を中心に水田に力をいれるも不成功、北海道長官西郷従道来村 |
| 明治16年 | 伊勢講の積立金で杵臼神社を建立 |
| 明治21年 | 大洪水にみまわれ移住者出る |
| 明治22年 | 本巢万太郎が発起人になり村民会を開き学校設立を議する |
| 明治23年 | 寺子屋を浦河小学校杵臼分校と改称して設立 |
| 明治26年 | 徳島より移民入植、藍づくりを行う、藤田九平マッチ工場建設し軸木(じくぎ)製造を行う、高尾佐之治電柱材の伐採搬出に土人を使う |
| 明治28年 | 杵臼中央道路建設 |
| 明治35年 | 本巢長平アラブ系馬一頭導入 |
| 明治37年 | 本巢万太郎、吉田市松を中心に行った幌内川全区間護岸築堤完成(丘堤防と名付ける)、日露戦争はじまる |
| 明治39年 | 本巢長平満州より白菜を移入、軍拡に合わせ馬政局が設けられる |

明治40年	国立日高種馬牧場、西舎に建設、本巢長平の牧場で入植記念競馬開催10年後杵臼競馬となる	昭和40年	老人長生会
明治42年	夏日高地方に馬の疫病発生、多くの馬が斃死	昭和43年	十勝沖地震発生
大正2年	低温と大暴風雨で稔りかけた水稻、農作物流出	昭和45年	杵臼開村百年記念式典、季節保育所が新設の杵臼生活館に移転、杵臼小学校80周年記念式典
大正4年	西舎・杵臼を合併し浦河町となる	昭和54年	杵臼ほか四地区（東部地区）が丘と海の観光レクリエーション基地「緑の村」に指定される
大正9年	食糧難時代到来、本巢長平ほかの発案により水田各町のため土功組合設立を図る	昭和57年	杵臼斉藤牧場生産のモンテプリンス号が天皇賞受賞
大正11年	本巢長平代表で杵臼土功組合を創設		
大正12年	灌漑溝工事に着手、10月31日竣工		
大正14年	特産の蔬菜の販路拡大のため杵臼信用販売組合を創設		
昭和10年	本巢長平幌泉より綿羊を導入、浦河まで日高線開通、英国ミッチャム村から洋種薄荷を導入		
昭和11年	幌別川左岸河川保護組合創設		
昭和16年	杵臼青年会創設		
昭和22年	農業会解体、代わって、農業協同組合設立、杵臼小学校PTA会設立、通学橋できる		
昭和24年	杵臼連合自治会発足		
昭和26年	杵臼土功組合は杵臼土地改良区に組織変更		
昭和27年	十勝沖地震発生被害甚大		
昭和29年	幌別川砂防ダム工事施工		
昭和31年	杵臼会館建設		
昭和34年	幌別川砂防ダム、幌別川堤防が完成		
昭和35年	開村90年式典		
昭和36年	杵臼線バス開通、杵臼中通道路開通、杵臼鎌田牧場生産馬シンツバメ皐月賞優勝、鎌田牧場産タカマガハラ東京競馬場で天皇賞を獲得		
昭和37年	杵臼連合自治会の村づくりの実践活動に北海道生活文化賞が与えられる		
昭和38年	杵臼改良区は浦河町土地改良区に吸収合併される		

年譜が示すように、いま杵臼は、開拓当初のそれと大きく変化した。一世紀を超える時の流れは杵臼の農業を変え、労働の形態を変え、集落の形態を変えてきた。「入植以来すでに壱百年、今や農業経営は飛躍的發展を見せている。特にすぐれた野菜の産地としてその名は近隣にひびいている。更に元老本巢長平は満州より軽種馬を購入して馬産改良につとめ軽種馬王国浦河町の基礎を築きその生産地として堅実な歩みを続けている」（浦河町史編集委員会、1971、上巻、160）。^{註1} 複数世代にわたる苦難の歴史は実を結び、杵臼連合自治会の村づくりの実践活動には「北海道生活文化賞」（昭和37年）が与えられている。

ここで、日高地方の馬産（現在の杵臼にとって重要な馬産）について、以下、岩崎徹の記述を借りて、見ておくことにしよう。^{註2} 俊馬の産地として日高は恵まれた条件をもっていた。日高地方の気候は北海道の中では温暖で雪も少なく、濃霧発生地帯であり火山灰地が厚く被覆しているので、農業としては普通作目よりむしろ畜産に適切で、古くから馬産地として位置づけられてきた（岩崎、2005、32）。日高には文化年間からの馬産の歴史もあった。日高の馬産の起源は、文化年間（1804 - 18年）の駅場の配置に始まり、安政5年（1858年）には、幕府が元浦河に馬牧を設置する。

馬牧は明治になって廃止され、収容馬約500頭は三石・浦河・様似などの民間人に貸与されることになる。その後、明治5年（1872年）には、小型馬を大型化して広い用役に適応する改良を認めた当時の開拓使・黒田清隆によって「新冠牧場」が開設されている。・・・明治15年（1882年）に開拓使が廃止となると、新冠牧場は明治17年（1884年）に御料牧場となった。御料牧場の目的は、西洋文化にならって皇室が行幸の際に馬車を利用するための馬の生産であり、また、交通運搬手段、農耕用に使う大型馬匹の需要に応えるためであったが、3年後にはこの牧場にサラブレッド種が輸入され、穂高地方の競走馬生産に大きな影響を与えることになった（岩崎、32-33）。明治40年（1907年）には浦河町に農林省日高種馬牧場が開設されている（岩崎、34）。

競馬の国際化が北海道・日高地方に特化を促してきた。サラブレッドは馬のなかでも皮膚が薄く、暑さに弱いということも北国・北海道への特化の理由である（岩崎、2005）。「日高地方は北海道の他の農業地帯に比べ面積が狭かったので、規模拡大によって活路を見出すことは困難であった。そこへ、折からの競馬ブーム。あっという間に水田が牧草地に変わり、競走馬が米に代わる主役になっていった」（岩崎、17）。水田が牧草地に変わり、競走馬が米に代わる主役になっていく一方、零細経営という課題にも直面する。「日本の競走馬牧場は、一部に大規模な農外資本・企業牧場もあるが、圧倒的多くは零細な家族牧場である。現在ある企業経営も、家族経営の名残を根強くもっている。日本の競走馬生産は<趣味>や<名誉>のためというより、第一義的には<経済動物><生活の糧>である。日本の生産者はマーケットブリーダーがほとんどである」（岩崎、18）。「生産地には、今なお<前近代的>といえる古い制度・慣行が存在する。仔分制度と流通における商慣行

がその最たるものである。<仔分制度>とは、繁殖牡馬を所有する馬主が種付料を支払い、生産者が他の生産手段を提供し、出来た産駒を分ける制度であるが、これは戦前にあった馬小作の名残である。また、競走馬の流通は依然として販売者と購買者との相対取引である庭先取引が圧倒的である。庭先取引は、そこに仲介者や代理人等、複雑で不透明な人間関係が入り込み、<前近代的>とも言うべき慣行が今も温存されている。仔分けも庭先取引も口頭での契約で、契約内容も曖昧な場合が多く問題を抱えている」（岩崎、18-19）。^{註3}

以下は、本巢さんの記憶する杵臼の歩みである。短時間の限られた聴き取りであったが、コンパクトな内容は杵臼の歩みをよくとらえていて杵臼の形成と現在を扱うわれわれにとって示唆されるところが少なくない。

明治初年当時の浦河は一帯が森林で熊がよく出没しました。そしてバツタの大群にも悩まされました。動物の被害が甚大な上に、川の洪水・氾濫があり畑が流されました。

移住者は24戸、約180人でしたが、半分近くは縁戚関係にありました。天草からの縁戚関係にあたる長崎の人も天草団と一緒に杵臼に来て西舎に移りました。元来天草は本家・分家の強い土地柄で縁戚関係でない人は養子縁組をして分家の形をとりました。天草には差別があって、あるステイグマを持った者は後継ぎに出来ないということもありましたので、天草に住み難い人なども移住したと聞いています。天草は土地も無く家も小さいものでしたから、一旗上げるつもりで移住したのです。移住者は北海道に天草の文化を移入しました。同時に、土着の先住民と仲良くしてこの土地で生きていく方法を学びました。

いまの子ども（息子）たちのお嫁さんは、みんな北海道、他県（内地）からの方です。内地の人も多く、それが内地との交流をはかる上でよい機会にもなっています。移住後、天草との深い交流はありませんでし

た。戦後暫らくしてから浦河の議員が天草に行った、そんな状態でした。天草に橋ができてから交流ができてきたように思います。もちろん天草の方では自分たちのところから浦河に来た移住者がいたことはわかっていたでしょうが、長く、音信不通の状態が続いたようです。浦河（北海道）と河浦（天草）は自治体の間で友好都市（姉妹都市）の提携をしていましたが、平成18年に河浦が合併したのを契機に解消し、合併後のいまは住民・地域レベルで交流をしているようです。

移住した人びとの暮らしですが、明治4年頃は粟・ひえ・芋の栽培で生活し、海には出ていなかったようです。大正期に粟・ひえ・芋から米に転換しました。本巢家の先代が種もみを導入して、水田開発をし、杵臼における米作の基礎を作りました。

杵臼で移住者は団結しました。苦しい生活に耐え、成功したのは、故郷に錦を飾るという意気込みでした。厳しさに耐え切れず天草に帰った人もいます。労働は家族労働で3-4人の人を頼むことがありました。幌物川で建網漁があり、舟で川を下りて魚を売いました。剣道の稽古が身体を鍛えるのによいということで剣道が盛んで、剣道を通して絆を深めました。最終的に残ったのは7割ぐらいでした。2代目になると初期の段階とちがい分散の動きもみられました。子供がいなくて（死亡して）移住した人もいます。^{註4}

1907年に農林省の牧場ができ、中央競馬会と浦河町に払下げられました。馬が盛んになったのは戦後です。殆どが中央競馬会へ出しました。高く売れたので7割ぐらいの人が馬をやるようになりました。大正時代にサラブレッドを買いに行ったことがありますが馬が盛んになったのは昭和30年代です。私も、それまでは水田・畑・牛などをやっていたのですが、それらは忙しいわりに儲けがなかったので＜馬＞に転換しました。浦河は馬の町ですが、馬主は減少の傾向にあります。牧場経営者（生産者）は数百で、馬の調教をやっています。生産1年目は、1～2歳馬をあずかり調教します。そして馬市に出します。杵臼では昭和40年代から競走

馬生産に従事する農家が増え、現在杵臼の農業の7-8割は馬になっていると思います。生産者は治療代・保険代が大変です。私のところには後継者＝息子がいますが、後継者難のところも多く、20年後がどうなるか心配です。経営の鍵は地方競馬の動向です。ギャンブルの構造が変化しました。また人気ジョッキーの出場でのカバーにも限界があります。このまま地方競馬の衰退が続けば経営は苦しくなります。地方競馬は馬場の建物が立派過ぎますね。建物に金を掛けすぎます。近頃は生産者にも馬（放牧地）に金をかけないで住宅にかけの人がいますがこれは危ないことだと感じています。強い馬をつくるためにはなんといっても自由放牧が大事ですから昼夜を問わず放しておく牧場と広い土地が必要になります。その意味で、一番大切なのは土地の管理です。次に、どういう餌が必要かを見極めることでしょうね。私は飼育の餌は自前で作っていますがこれが大変です。人が触ってやることも大事です。よい・広い場所が必要になります。馬は環境に慣らしていくことが大事で、社台ファームに負けない馬作りをするには、人・馬・土という基盤作りが必要です。これまで個々の農家がやってきましたので共同化は難しいように思います。馬主も変ってきています。現状は厳しい状態です。これから淘汰が進みそうです。廃業した農家の土地を借りて杵臼以外の人（外からの人）も入ってきています。私は現在馬一本にしています。最初は白老の吉田さん（馬主）の馬をやっていました。任せてもらうために馬主のことを聞かなければなりません。馬主の殆どは関西・関東の人ですね。経験では、間に誰かが入らない直接預託が一番良いように思います。馬主との関係はなんといっても＜信用＞です。この信頼関係は、子供の代にもつながっていきますから、馬主と生産者との関係は信頼関係が鍵になります。

自治会は西舎と杵臼それぞれにあります。西舎との交流は、祭り、演芸会などで深いものがありました。いま連合はありますが昔ほど活動していません。杵臼

は連帯が強く草刈や環境に積極的です。杵臼はまとまりの良い地域で地域内の活動が活発で巧くいっていると思います。地域がまとまりをもってひとつになるということは子供の教育にもよい結果をもたらすと思います。9月23日は杵臼の祭り（杵臼神社）でこれには小学校・中学校の先生にも参加してもらっています。

杵臼の奥に樺太から引き上げてきた（天草から浦河に来て2代目が樺太へ。用水路等の負担金を払えない人が樺太に渡りました）人たちの村があり樺太に行く前は三井の木材を出す作業に従事していましたが、後に農業をした人もいます。^{註5} 樺太に渡り戦後戻りました。ここには内地から来た人もいて、170戸ほどあり学校もありましたが現在は30戸ぐらいです。自治会も別になっています。私は、平成2年、今がチャンスと思い自治会の活動を活発にするような提案をしました。現在は杵臼90戸、そのうち約30戸でグループを作っています。^{註6}

まとめに代えて—一周縁の変容：—明日の福祉国家のために—

以上、われわれは、天草移民団について概観した。ここでは、小論のまとめに代えて、明治国家における北海道移住の問題と天草移民団の位置づけについて言及しておくことにしよう。「北海道移住の問題は日本の近代化と北海道とを結ぶ一つの環であり、北海道史にとっては永遠のテーマの一つである。問題はそれを北海道開拓の前提条件として理解するだけでなく、日本近代化過程における本州各地域社会の変質と北海道移住との内在的な関連を明らかにすることであり、移住民によって構成された北海道地域社会の特質を理解することである。さらに移住と混合による文化変容を考えることである。これらの論点は、本州諸地域と北海道諸地域との地域間交流、または文化圏の問題、農民のみならず、漁民や商人・労働者の移動・交流の問題などをふくんでいるから、北海

道移住の問題は、日本近代史と北海道史を結ぶ広く深いつながり目だということになる」（永井、2007、8）。永井の指摘でとりわけ注目されるのは、＜問題はそれを北海道開拓の前提条件として理解するだけでなく、日本近代化過程における本州各地域社会の変質と、北海道移住との内在的な関連を明らかにすることであり、移住民によって構成された北海道地域社会の特質を理解することである＞という主張である。正に、近代における北海道移住という問題は、日本近代化過程における本州各地域社会の変質と、北海道移住との内在的な関連を明らかにすることなくその本質を解明することが難しい。天草移民団についていえば移民団という形で移住者を出した天草地域の経済的・社会的・文化的構造がある。もとよりその分析はわれわれの力量をはるかに超えるところであり、当面、北野典夫『天草海外発展史』、渡辺尚志『近世地域社会論—幕領天草の大庄屋・地役人と百姓相統一』、高木繁幸『島原藩の経済』など、専門家の研究に委ねたい。ここでわれわれが記憶しなければならないのは、天草移民団の背景には、まちがいなく、天草という貧困に喘ぐ地域社会、搾取と差別を濃厚に留めていた社会、階層分解が未成熟な故に封建的支配を強く残存させていた地域社会が存在したということである。天草移民団と言われる天草からの北海道移住はそうした歴史のなかに現れたのである。

もちろん、天草移民団を誕生させた要因はそれに尽きない。何よりも、天草移民団の背景には明治国家の北海道政策と開拓使の存在がある。開拓使の存在なしに天草移民団は存在しない。「1871（明治4）年7月の廃藩置県によって、新政府の統一的権力が確立したが、これに呼応して北海道でも開拓使は各藩等の分治を廃して全道を直轄し、黒田の建白を基礎にしたいわゆる十年計画が立案され、強大な権力と財政を背景にして、はじめて

統一的な北海道開拓が実施されることになった」(井上清・旗手勲、1967、339)。その計画は、「1872(明治5)年から十年間に国費1000万円(当時の年間政府予算額に相当)と開拓証券250万円、それに管内の税収全部を投ずるという大規模なものであり、これによってロシアへの軍事的防衛基地をかためるとともに、上からの資本主義育成にとって必要な、北海道の未占有の土地や、天然資源を開発しようとしたものであり、政府の富国強兵・殖産興業の政策を北海道に具体化しようとした」ものであった(井上清・旗手勲「沖縄と北海道」岩波講座、日本歴史、16、近代3、338～339頁)。

明治国家による北海道への移住政策にはいくつかの段階が認められている。「本州における農民層分解が未成熟な結果、開拓使の手厚い移住保護にもかかわらず、北海道への移民数は停滞を続け、開拓は難航せざるをえなかった。この対策としてとられたのが秩禄処分^{註7}の士族授産の一方法として、失業士族の北海道移住であった」(井上清・旗手勲、1967、339)。^{註8}天草移民団の移住については、それが初期の段階、別な表現をすれば開拓使主導の移住であったという特徴がある。井上・旗手が指摘するように、開拓使主導の移住政策の後に、失業士族の北海道移住が促進されてくる。浦河郡への天草移民団の移住を取り上げる場合、そのことは十分念頭におかれなければならないように思われる。^{註8}

この問題にこれ以上立ち入ることは避けよう。大事なことは天草移民団が、<開拓使移民団>と表現してもよいほど、開拓使に依存していたということである。移民団がどこまで開拓使の意図を理解していたかはわからない。新しい天皇制国家が民に与えた貧困脱出の契機=有難い思召し召しぐらいには受け取られたかもしれない。とまれ、民の理解が何処にあったかとは関係なく、開拓使の

目的は明確であった。朝山禄十の募集活動がそのことを端的に示している。北野の指摘を再出すれば、朝山の募集活動は、国家的使命感に訴えたものであった。江戸時代から長崎港外郭警備の任にあたってきた大村の藩士であった朝山はロシアの動きに敏感であった。その思想は、開拓使庁の官僚として、<北海道を、一日も早く、皇国の図版として<確立する>ことを念願とした。したがって、彼は、杵臼、西舎の開拓村建設に全面的な援助を惜しまなかった(再出)。開拓使は初期明治国家の北海道政策を映し出す。杵臼に移住した人びとの暮らしは厳しいものであったにちがいない。「開墾にあたっては狼の遠吠えをきき、熊の出没に身の縮む思いをした時は、郷愁の念しきりに生じたということである」(再出)。「しかし辛苦十年、血と汗によって開墾した沃地を見てはこの地への愛着がしきりに湧いて来る。そして連年内地からの移住者達が自分たちに比べて非常な悪条件をも克服して開墾に血みどろの戦いをしているのを知っては、今更に帰郷も鈍り、遂に住み慣れたこの地永住の地と決意するに至った」(再出)。このくだりは記憶に値する。開拓使移民団は見方によれば恵まれていた。北海道史と移住民についての考察は、移住地の気候や自然条件に加え、移住の時期と移住を主導した主体によるちがいを考慮にいれなければならないであろう。なお、ここで一言加えておこなうならば、開拓使移民団が如何に恵まれた存在であったとは言え、自ら積極的に共同の秩序を守り、先住民との関係を良好なものとして、誠実に未開の地を生きた移住者たちの生き方である。「移民の品行に就き開墾の成績を了知するを得べしと、果たして天草移住の品行は衆人の賞賛する所にして、土人オテナ(総代人を言う)原チェバタイは移住当時より同地に居住せしも未だ嘗て天草移住の品行悪しきものを見ずと言えり。而して甚三郎長男熊三郎氏農事の余暇あ

れば兄弟又は村民を集めて尚武の志を励まし、撃剣の運動毎夕のことにて小生を滞在中度々陣所を訪ねて、新聞紙上征清車の模様を聞き、義気満面に顕れ、義勇軍に従い度く志すものの如し」(前出)と言われたその生き方である。彼らは未開の地を堅実・誠実に生きてだけでない。多くの創意工夫をもって生き抜いた。

ところで、これまで、北海道史の研究は辺境、内国植民地という概念で主導されてきた。「辺境ないし内国植民地という表現は、近代日本の中の北海道の位置やその特性を測定するための手がかりである」(永井、前掲、15)。「辺境と内国植民地」という概念を研究枠組として定着させてきたといってよい。しかし、小論におけるわれわれは、あえて、北海道研究史が蓄積してきた論争と成果を脇におき、スタベンハーゲンの定義を意識して、「周縁」という概念を用いてきた。その意図は、スタベンハーゲンのいう周縁という概念が、天草や浦河、そして近代日本と現代日本を貫通している構造的な歪を捉えるのに有効ではないか、という発想によるものである。問題の所在でふれたように、小論におけるわれわれのねらいは、天草と浦河という二つの周縁を、国内移住＝天草移民団という視点で結び、(1) 近代日本と明治国家の移住政策を確認すること、(2) 明治国家という新しい国家の下で周縁を生きた人びとの生き方を観察することの二つにおかれている。われわれの認識によれば、近代日本における「国家と周縁」の問題を検討することは、近代日本を知る上で不可欠な作業である。不可欠なのは近代日本の解明にのみ向けられたものではない。「近代日本における国家と周縁」というテーマは、近代で完結することなく現代に及んでいる。それは、近代日本—現代日本が胎内に抱える、あるいは近代日本—現代日本を貫く歪であって、現代的なテーマである。近代の歴史においてさえ、北海道はその辺境

性と内国植民地の位置に変容を経験した。辺境あるいは周縁が歴史のなかで位置を変えてくるのは必然である。歴史は近代における周縁を消滅させる一方、現代的周縁を生産する。生産される周縁＝現代的周縁は世界資本主義の動向を反映して、空間的であるよりは市場的・階級的・階層的であり、より複雑な様相を帯びている。明治国家と同じく、われわれの現代国家も、いまなお、周縁の問題を止揚し得ていない。それどころか周縁は複雑な形で再生産されており、周縁問題の止揚が現代国家の、あるいは世界社会の重要課題であることを教えている。現代における周縁性は最先端の技術と共存する。しかし、それは深く潜在し、容易にその姿を現さない。つい先ごろまでわれわれは原発で働く労働者の実態に関心を寄せずにきた。周縁は最先端の技術と電力会社の作業現場に生産されていたのである。

いま天草に、周縁の面影はない。「貧しいということは恥ずかしいことではない。その中で、いかに生きたかが問題なのだ。村岡伊平治(島原出身)ら人身売買業者どものことはさておき、彼女たちは、泣き言も言わず、へこたれもせず、みずからの人生を大海原の彼方へ飛雄させた。異国人への売春という<破天荒な挺身行為>に、わたしはむしろ、天草人の特性である勇氣とバイタリティーを学ぶ。懦弱な精神で、決行できることではない。よしんばそれが、底辺女性史的表情をもっていたとしても、彼女たちには罪はない。けっして、天草の恥などではない。その時代が、余儀なくさせたことである」(岡本、1978、5)。いま、ここに書かれた天草を見ることはない。しかし、まちがいなく、その時代、この二つの地域は、ともに周縁であった。遠く離れて直接的には関係のない二つの地域が明治国家の移住政策＝開拓使によって結合されることになった。もちろんそのことによって天草も浦河も、一挙に、周縁の

位置＝構造を変えることはなかった。現在、かつての天草と浦和は周縁から解放されている。しかし、その現在も、周縁に沈殿したあるいは付着した周縁性をすべて解消しなかった。構造的な周縁性に取り込まれた民衆は容易に周縁性から解放されることがない。われわれは、そのことを水俣と水俣病の例に見た（内藤辰美・佐久間美穂「明日の福祉国家と環境問題—水俣の教訓—」社会福祉、2010、日本女子大学社会福祉学会）^{註9}。残存する周縁性と新たに生産される周縁性、われわれは、いま、この二つの周縁性を意識して生きなければならない。周縁性が突き付けるもの、それは、周縁という現代社会の歪を再生産する構造に対する問いである。それは、明らかに、現代社会の病理性＝不健康に対する解明を求めている。^{註10}

註

註1 浦和百話の第13話は、明治14年前後における本巢万太郎の取り組みを次のように伝えている。万太郎は儉約を重ねて貯めた金を持って天草に行く。そして万太郎は天草から農具や穀類・野菜の種を持ち帰る。「それから万太郎の働きぶりはめざましかった。開墾を進めるのにプラオ、ハローといった舶来の農具を導入する一方で、馬を積極的に農耕に取り入れて、のちの本巢牧場の礎となってゆく。開墾した畑には大小豆の作付を増やし、さらにはオロマップ川の沢水を利用した水稻の栽培さえ試みるようになった。また一方で、収穫した野菜を広く幌泉（現えりも町）、様似、浦河などの市街で売ること開始する。キャウ、ナス、カボチャ、ジャガイモ、トウモロコシ、少しあとにはキャベツ、ハクサイなどの葉物もふくめ、野菜ならなんでも売れた。こうした試みが、のちに村独自で浦河、様似に「杵臼蔬菜市場」を開設することにつながってゆく（グルッペ21うらかわ、1991、63）。「幌別川流域で一番早く競走馬を手掛

けたのは、先程からたびたび名前が出てくる本巢長平さんという様に聞いているね。資料を見ても明治毎時35年にアラブを導入し草競馬で走られたと云うのだから古い話だよ」（杵臼記念事業協賛会、1992、108）。「昔の事だから、競走馬の少ない時期に馬を集めるだけでも大変なことだったと思うが、そうした老人の苦労が稔り、杵臼地区でも蓑田南兵衛さん笹地郡蔵さん、鎌田管仲さんと次々と馬を飼う人が増えて来て、終戦後の競馬ブームとなり現在では、全んどの人が競走馬に携わる時代になったのだから先人の発想は大したもんだね」（杵臼記念事業協賛会、1992、109）。いま、杵臼を含む、浦河、日高は、競走馬の生産地として知られている。北海道における馬の飼育については先住民のアイヌに見られなかったことから、和人の渡来にともない移入されたものと推測されている（浦河町史、上巻、843）。明治に入り、開拓使、三県時代は馬の飼育に大改革を見た時期である。「北海道で本格的に馬の普及を見たのは開拓使に於いて多く官馬を払下げ、牧場を与えてその繁殖を奨励してからのことであった」（浦河町史、上巻、848）。開拓使、三県時代の後道庁時代に入ると、軍需の拡大による馬産が確立する。そして軍需の拡大は家畜の力点を牛から馬に移行させている。それは、「世界各国の軍需増強の動きが、次第に火砲・軍馬に向けられたのに対応する我が国の軍備強化の動きと軌を一にするものであって、軍馬の必要性が認識されるとその軍需が拡大され、それに伴って明治20年以降民間の所有馬の増殖がはかられるようになった」（浦河町史、上巻、853）。「日清戦争は、軍馬の需要を極度に増加せしめ、馬の生産、育成を目的とする、いわゆる馬産経営を成立させる経済的基盤を与えた。このことは、大農場のみならず、一般の農家経営にも普及、浸透してゆき、それがまた以後の馬産の発展を支える基盤となった」（浦河町史、

卷、858)。さらに、「明治19年（1886）の＜北海道土地私下規則＞並びに30年の＜北海道国有未開地処分法＞によって、国有未開地の大機微な処がなされたが、このことが資本主義の発展に伴い、数多くの民有牧場を成立させる結果となった」（浦河町史編纂委員会、1971、上巻、863）。

註2 岩崎徹の文章は音声言語で書かれている。本論では、文章の流れを考慮し書き言葉に代えているが、主旨はそのままである。

註3 競走馬の生産が地域産業となるにつれ、その位置づけも問題になる。「戦後、競走馬生産の農政上の位置づけは曖昧になり、産地の人たちは農政上の位置づけの明確化を国に求めてきました」（岩崎、21）。「私が競走馬を農業生産の仲間に入れてよいと思うのは、次の理由からです。それは、競走馬生産が農地を利用し、動植物を生産（馬と牧草）することと、農民・元農民による生産が圧倒的に多いからです」（岩崎、20）。日本の場合、競走馬の生産は家族経営が支配的であるが、その理由は、「(1) 生産に必要な農地は最近までの農地法では原則として農民（耕作者）しか所有・利用ができなかったこと、(2) 1960～70年代の競走馬への転換がなされた時期は競走馬資源が特に不足していた時期であり、専門的な知識・技術のない農民でも容易に生産することができたこと、(3) 競走馬生産に必要な資金を総合農協や競走馬団体からの助成・支援を受け、また生産資材の供給や競走馬の販売を総合農協・専門農協の事業を利用することによってまかなってきたこと、(4) 戦後の競走馬は長年にわたり、内国産馬保護策をとってきたことがありました」（岩崎、21～22）。

註4 移民品行剣術運動。移民の品行に就き開墾の成績を了知するを得べしと、果たして天草移住民の品行は衆人の賞賛する所にして、土人オテナ（総代人を言う）原チエバタイは移住当時より同地に居住せしも未だ嘗て天草移住民の品行悪しきものを

見ずと言えり。而して甚三郎長男熊三郎氏農事の余暇あれば兄弟又は村民を集めて尚武の志を励まし、撃剣の運動毎夕のことにて小生を滞在中度々陣所を訪ね、新聞紙上征清車の模様を聞き、義氣満面に顕れ、義勇軍に従がい度く志すもの如し。（浦河町史、上巻、162）。

註5 上杵臼について『浦河町史』は次のように記述する。現在の上臼杵に入植がはじまったのは昭和25年11月末である。この地は元日高種馬牧場用地一部開放に従い、国有地1、600町歩に道有林200町歩も開拓地として指定せられ、入植戸数143戸が入植することになった。・・・入植者は引揚者や、その他あらゆる地方から未来の希望をいだいで集まった人達の混成部隊である。而も入植前の職業はまちまち、農業経験の少ない人が多かっただけに、鬱蒼と茂る原始林を伐採して耕作面積を増大する開墾の業は正に血の出るような苦勞が伴う。・・・呻吟する入植者の中には、生活の合理化と営農の安定化を求めて、いま南米への移民運動を話題としている。何戸かの移民があれば、彼等の耕作地は残るものに分配され、それだけ耕作面積が拡大されるわけであるが、その代償として彼らの借財も背負わされるのである。試みに、33年秋、道と道移民協会から選考委員が来町して現地に赴き、移民希望のものを調査するに30戸余りあったということである。・・・こうした現状から昭和32年度葉、上杵臼開拓地は遂に不振地区指定されてしまった」（浦河町史、上巻、162～164）。

註6 本巣さんに対する聴き取りは、2007年8月、内藤が行った。文責は内藤にある。

註7 北野典夫は『天草海外発展史』（葦書房、上巻）の中で、「日高国浦河郡杵臼村に入植した明治4年（1881）の天草農民21戸93人、これらの人々は、北海道開拓の先駆時代を飾る壮挙を成しとげた。このほかには、北海道開拓を志した天草島民

がいなかったのであろうか。滋賀大学教授鶴谷寿氏の研究によれば、日本のロバート・オーエンとたたえられる旧幕臣佐久間貞一が、明治5、6年(1872、73)ごろ、天草島民の北海道移住を斡旋したとされている」北野典夫『天草海外発展史』葦書房、上巻、299～300、1985)と述べている。明治5、6年(1872、73)頃、依然として移住の斡旋があったということは、開拓使の手厚い移住保護にもかかわらず、北海道への移民数は停滞を続け、開拓は難航せざるをえなかったという指摘に符合するものである。

註8 桑原真人の「明治・大正期の北海道移住」は示唆の多い論文である。「北海道開拓の基幹労働力が、士族、屯田兵、囚人といった強制労働力=特殊移民から一般農業移民へと次第にその質的転換を遂げる時期は、ほぼ日清戦争前後を画期として開始される。そして、以後、第一次大戦期にかけての約20年間は、北海道移住の最も著しい時期であった」(桑原真人「明治・大正期の北海道移住」新しい道史、第7巻第5号、1969)。開拓使による移住はそれよりも古い形として把握される。この点についても少しふれば、明治国家の北海道政策は、開拓使、三県時代を経て道庁時代(明治19年、1886)目的と内容に変化が現れる。「日清戦争後には、台湾や朝鮮・中国が新しい海外植民地として登場したため、未開の宝庫としての北海道の地位は当然低下しはじめた。この動きはとくに日露戦争後決定的となり、南樺太領有によって北海道の軍事的意義が薄れ、台湾・朝鮮および中国大陸への本格的な植民地経営が開始されるとともに、北海道は資本にとっての最良の富源地ではなくなった」(井上清・旗手勲、1967、355)。「日露戦争後の北海道は、軍事的前進基地や辺境=内国植民地としての性格を失い、主として本州大資本が経営した鉱業・製鉄・製紙・製麻・製粉・製糖・麦酒等諸企業への資源や原材料の供給

地として利用され、またこれらの関連第二次産業は大部分本州に根拠地を置いたため、その製品輸入市場にとどまってしまった」(井上清・旗手勲、同上、1967、355)。

註9 水俣に関してふれば、われわれの水俣研究は天草を強く意識する。天草—水俣、天草—浦河、天草—海外の出た女性たちは、それぞれ、われわれの射程にある。

註10 そうした認識に関連して、ここでは以下の指摘も記憶にとどめたい。「不知火海は、熊本県の西海岸と天草島との間の海である。不知火海の沿岸では、今日でも古風に、漁民のことを「舟人」(ふな)といい、漁民の住む部落を「舟津」(ふなつ)という。・・・舟津は路地一つ、あるいは川一つ隔てて、百姓部落と接続している。たとえば天草下島東海岸のほぼ中央にある、宮野河内という古い舟津を訪ねてみると、山のせった海沿いに家々が並び、溝のような小さい川を境に、左側が百姓部落、右側が舟津であり、ほんの少し行けばまた軒を接して百姓部落となるのである。しかし、そのわずか数尺の川または路地一つで、言葉が違う。顔つきまで違うという人もいる。水俣の人に聞くとこういう。「(水俣)の舟津で、所は一口に言えば、水俣の人種、全然離れた違う人種ち、見方をして良か如(ご)たるな。近親結婚で血はよう濁ってしもうととじゃなからうかと思うな。天草でも舟津という地名のある所は、顔ば見てみなせ、みんな違うばい、その付近の人たちの顔立と。水俣に来て水俣の舟津に行ってみれば顔立ちが違うもン、今子供たちはそげン事はなかばってン。言葉聞いても全然水俣弁とは別でしょうが。あそこは水俣弁じゃなっかですけンな。本当に水俣と一線引いてしまったような形の部落じゃモンな。一つの法律じゃろか、一つの掟て、いうんじゃろか、そういうやつがあったじゃなからうかと思う、昔。一天草の漁民の原点は、天

草の乱後の幕府の漁政にある。一万二千余名の天草島民が原城に殺され、村々に人影なく島の大半が亡土と化した後、徳川幕府は天草を天領とした」(谷川、1989、22)。「この前近代はどのように近代に引き継がれたか。一言でいえば、農民、魚民間の通婚の途絶であり、漁民の被差別民化である」(23頁)。「民衆の意識や思想を、支配被支配の他律の構造から説明して終わりとする例は多い。だが、民衆見珠からが自律のものとして作り出した意識や思想でなければ、同士問題とするに値しよう。また、現実の社会を規律する強靱さを持ち得よう。不知火海の場合、漁民に対する意識を形成した要因は、農、漁の本質の差、疾病、貧困の三つであると考えられる」(24頁)。「水俣病患者に対してチッソ労働者が、患者のなかに労働者自身が含まれていたにもかかわらず、ひややかな態度をとりつづけた理由は何か。この問いにこたえる常識は、企業への忠誠心とか、保身とか、低収入ある者からの差別とかいった、どこの企業城下町にもみられる傾向であろう。水俣にもそれが皆無とは言わないが、その底に流れているのはもっと白熱した憎悪である。冷淡と言っても、憎悪が言葉のかたちをとらないための冷たさである。水俣を多くの知識人や芸術家がおとずれたが、この謎を解きえた者はいない。石牟礼道子の諸著作も、その功績はみとめるが、いわば患者側からの一方通行であるために、憎悪の相互性を形象化するまでにはいたっていない」(谷川、1989、24)

引用文献

- 石牟礼道子編『水俣闘争わが死民』現代評論社、1972年
- 渡辺尚志編『近世地域社会論』岩田書店、1999年
- 北野典夫『天草海外発展史』葦書房、1985年
- 浦河町史編纂委員会『浦河町史』浦河町役場、1971年
- 浦河町史編纂委員会『新浦河町史』浦河町役場、2002年

- グルッペ21うらかわ編『浦河百話—愛しきこの大地よ—』浦河町、1991年
- 司馬遼太郎『島原・天草の諸道』朝日文庫、2006年
- 下中邦彦編『日本残酷物語』第1部「貧しき人々のむれ」、平凡社、1959年
- 高木繁幸『島原藩の経済』ゆりり書房、2006年
- 下中邦彦編『日本残酷物語』現代編1、「引き裂かれた時代」平凡社、1960年)
- 杵臼記念事業協賛会『拓魂—杵臼開基20周年・自治会発足40周年記念誌—』記念事業協賛会、1992年
- 岩崎徹『場産地80話—「日高から見た日本競馬—』北海道大学出版会、2005年
- 永井秀夫『日本の近代化と北海道』北海道大学出版会、2007年
- 井上清・旗手勲「沖縄と北海道」岩波講座、日本歴史、16、近代3、1967年
- 岡本達明編『近代民衆の記録—7漁民』新人物往来社、1978年
- 谷川雁「無数の暗点、白熱した憎悪」草風館、『開書水俣民衆史・付録2、草野風邪便り第34号、1989年
- 桑原人真人「明治・大正期の北海道移住」新しい道史、第7巻第5号、1969年
- 北野典夫『天草海外発展史』葦書房、昭和60寝12月、上巻、239頁以下「蝦夷地開拓と辺境精神—日本海を渡った一隻の蒸気船—」(239～)に北海道移住の契機が記述されている。

R, Stavenhagen, *Peasant Societies and Development*, R, スタベンハーゲン/山崎・原田・青木訳『開発と農民社会—ラテンアメリカ社会の構造と変動—』岩波書店1981、49

付記

浦河への移住は、天草移民団だけではない。同じ年、長崎からの移住者が杵臼に隣接する西舎に入植した。兵庫県三田からの移住も続いた。小論はもっぱら天草

移民団に限定した。なお、付言するなら、今回われわれは天草移民団（北海道）を取り上げた。天草の周縁性は北海道の移住団を観察するだけではわからない。この土地の周縁性は、多分、シベリアや中国大陸そしてアジアに出て行った女性たちの存在を通じてより鮮明にされるであろう。もちろん天草だけではない。日本の近代は周縁化された女性たちによって支えられていた。その解明はわれわれに与えられた次の課題である。

共同執筆の分担についても記述したい。本論は、「問題の所在」と「まとめに代えて」、および「北海道浦河―集落杵臼の形成と現在（戦後）の一部（インタビューの部分）」は内藤が、天草移民団の背景―天草の経済社会状況と天草移民団―と、北海道浦河―集落杵臼の形成と現在（戦後）―は佐久間がそれぞれ分担執筆し、相互に推敲を重ねた後、全体を通して内藤が加筆修正を行った。

謝辞

浦河の視察に際しては、伊藤昭和氏（浦河町立郷土博物館学芸員）と浅野浩嗣氏（浦河町教育委員会教育課長）より現地の案内と資料の提供をいただいた。また、本巢三郎氏には貴重な時間とご教示をいただいた。記して感謝したい。